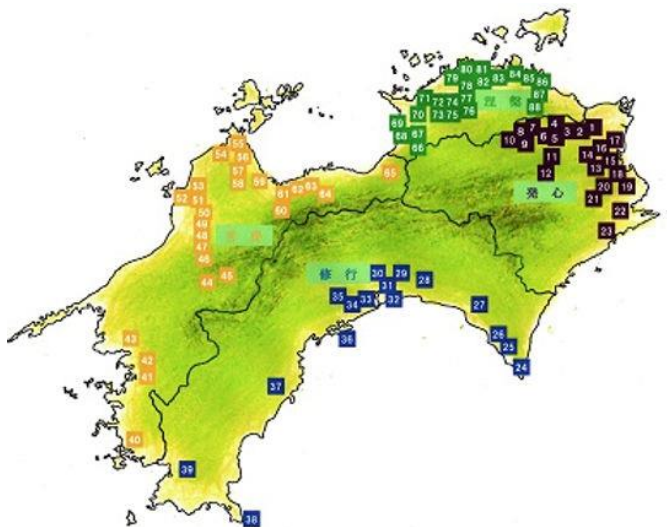


四国遍路・祈りの旅



(イ) 遍路たちの祈り

第1番霊場 「[霊山寺](#)」 から遍路の旅がはじまる。

この先、何があるのかわからない、何があっても構わない、行き倒れ覚悟、ただただ遍路道を歩いてゆく。

…第5番霊場「地蔵寺」での出来事だった。

地蔵寺の境内には、真ん中に大きな銀杏の木がそびえ立っている。

その大木を囲むかのように、本堂と大師堂が向かい合って建てられてある。本堂で般若心経を唱え終えて、大師堂に向かおうと振り返ると、目に映ったその光景にショックを受けた。

巡礼をしている家族のようであった。

車いすに乗った一人の男の子がいた。

その横で父と母と思われる方が、地面にひれ伏すようにして拝んでいた。

車いすの後ろには、そのハンドルを持って立っている小さな女の子がいた。

何か悲しそうな表情であった。

何とも言えない光景を見た。

その横を静かに通り、大師堂へと向かった。

銀杏の大木の葉が風に揺れる。
巡礼者を見守るように大師の像が立っ
ている。

何故かはわからない。

歩けない我が子が、
歩くことが出来るようにと、
家族で四国霊場を巡拝しているように
思えた。

その家族の敬虔な祈る姿が、今でも目
に焼き付いて忘れることができない。



地藏寺の大銀杏

高知の安芸で出会った

「四国ルンペン」のおじいさん。
一文無しで遍路をはじめ、托鉢しながら旅をしていた。

家族もふるさとを捨てて、一人四国に渡って来たという。

黒衣に遍路笠、白布で巻いた鉢壺を首にぶら下げ、長く延びたあごひげの下、鉢壺の中には小銭がいっぱい入っている。

しわがれた声で「お遍路でっかー」と話しかけて来た。



高知太平洋の砂浜

「四国ルンペンです」と自己紹介をされた。

しばらく一緒に歩いたが、インドのサドゥー（世捨人・風狂行者）のような人だった。

その歩き方が独特で、真似をしてみたところ、あまり疲れることなく長距離を行けるようで、一種の歩行術なのかと思った。

現在の社会は、金拝主義と利欲にまみれ、人間は人本来の本性を見失ってしまった…と嘆いていた。

野宿の日々に、時に焼酎を飲みながら「お大師っさん」を慕う。陽気で仙人のような風貌だったけど、フト後姿が寂しく思えた。

いつかは「天竺に行く」と言っていたけど、あれからどうなったことやら…。

遍路で出会う様々な旅人ー、
思い出すたび、自由への長い旅を想
う。遍路たちの「祈り」がこみ上げて
来る。

（ロ）遍路と仙境、お接待

遍路の途上、すごく「靈感」の強い人
が高知の山奥に住んでいる、という話
を聞いた。それで、是非会ってみたい
と想っていた。

遍路道を何日か歩いて、
第45番霊場 「岩屋寺」 から土佐の山
奥へと向かって旅をした。

歩きながら、ヒマラヤ聖者の
「解脱の真理」という本を読んでいた。
…物質とは現れ出でざるものの現れで
ある。

…創造する生命に、何の努力もせずに

おのずから、本然の完全無欠の状態を
現出する働きを可能ならしめる、
あの意識状態に君は達することもでき
るのである…。

名前と住所をたよりに山道を登り、何
とかその山の上にたどり着くことがで
きた。

その人は、長年にわたり、一人山籠も
り修行をされている「神仙」のような
人だった。



突然の来訪者にもかかわらず、
G 師はあたたかく迎え入れてくれた。
山小屋の外観からは想像もできないほど、
部屋には空調設備や大きなテレビ、
望遠鏡等があり、壁中に書籍が並んでいた。

奥まったところには祭壇があり、神社のような部屋で、「ご祈祷」を専門にされているようだった。

そこで様々な霊的教えを請い、話は尽きることがなかった。

神仏の世界のことや、
遍路をしていた時に空海に会った話、
宇宙人と会った話など…。

一晩その小屋に泊めてもらいたいと願ったが、電話番号を教えてくれて、また後日、お会いできることを楽しみにした。

帰り際、師から思わぬ大金のお接待を

受け、山を降りて行った。

夕暮れ時、不思議なことに、師が指定された山あいの旅館にたどり着き、泊めてもらうことができた。

宿のそばには川のせせらぎが聞こえ、河鹿が鳴いていた。

この世の者ではない、というような人に出会った。後で思えば、その師の山に消え去っていてもよかったのではないかとも思う。



居心地のいい旅の宿、
静かで心地よい「仙境」にいるような
一夜であった。

あくる日、川の音に目が覚める。
窓の外は渓谷美、透き通った水が緩やかに
流れている。

昨日薄暗かったので、どのあたりの山
からどの道を通して降りて来たのかさ
っぱりわからなくなっていた。

川沿いに国道 33 号線まで歩き、
あるバス停からバスに乗って、次の霊
場・第 46 番 「浄瑠璃寺」へと向かった。

乗客はただ一人、
美しい山々が窓ごしに過ぎてゆく。
三坂峠を越えてから「次のバス停で降
ります」と運転手に言った。
やがてバスは止まり、運賃を支払い降
りようとするその時のことである。

運転手の方がポツリと言われた。

「お遍路さんは白装束、
白装束は死装束、
武士のハラキリと一緒にです。
いつ死んでもいいあなたに、
お金などもらえませんが、
…どうぞ、気をつけて。」

…この言葉は今も心に響いて来る。
運転手さんの声は淡々としていたが、
何故か遠くを見つめて何かを祈っている
ような感じであった。
運賃のお接待—運転手さんにお礼を言
ってバスを降りた。

四国は、大師の教えが生きる「密厳浄
土」なのかもしれない。

様々な仕事に就きながら、人知れず
「遍路の祈り」を支える菩薩のような
人々が住んでいる。

(ハ) 行き倒れ…旅の悲願

第46番霊場「浄瑠璃寺」で、霊場参拝者としては珍しい？、スーツ姿の一人の紳士と出会った。

そこでも「お接待」をいただいた。お接待を受けたら「納め札」を、頂いた方に名刺代わりに渡すという風習のあることを初めて知った。

四国遍路の「お接待」について、その方は丁寧に教えてくれた。



浄瑠璃寺の白蓮華

「お接待は快く受け入れることです。
相手の方の信心を汲み取って、
その人のためにも遍路は共に祈願して
お四国を回るのはです。
その人の心も巡礼していくのです。
それをありがたく、
また一体的に想って下さい。
その巡り合わせの因縁が、
自他もろともに仏の道を悟っていく
ということなのです。」

その紳士の方は、遍路の先達さんなの
かもしれない。心にしみいる言葉であ
った。

第53番霊場「円明寺」には、「マリ
ア観音」の碑がある。

その境内で年配の女性お遍路さんとす
れちがった。軽く会釈をした後、何か
つぶやかれたような気がした。

そして、高知のある霊場で地域の人達

が語っていた話を思い出した。

すごい「願かけ」をして、歩いて四国を巡礼している女性遍路さんがいるという話だ。

参拝を終えて次の霊場への道を少し速めに歩いて行ったが、その人を見つけることは出来なかった…。

第54番霊場「延命寺」へ向かう途中、瀬戸内海を眺めて休憩していた。車が止まり、年配の方が話しかけて来た。

北条のはずれまでお接待しますと言われるので、車に乗せてもらった。

その方は途中、ある句碑の前を通るといって、その句を読んでくれた。

…道のべに 阿波の遍路の 墓あはれ
これは昔、ある詩人(高浜虚子)が、お遍路さんのいきあたりの死を見て詠んだそうだ。その方は語る。

昔の人は、もう死期が近かったり、
病気でもう「死ぬ」という身になった時
せめて「お大師さん」のもとで
死んでいこうと、何もかも捨てて、
ただ最期まで歩き続けたという。
何処で死ぬかもわからない、
そんなことも考えず、ただ、大師のも
とで死にたくて「四国」を巡礼したそ
うだ。

このような話が、四国路には多くさん
あるのだという話をしてくれた。
その日は延命寺で野宿させてもらった
星がやたらと明るく輝いて見える夜だ
った。

翌日、次の霊場へ向かって歩く途中の
ことである。向こうから老婆が歩いて
来るのが見えた。

おばあさんは、すれちがいざまに白衣
の袖にさわりながら

…南無大師遍照金剛

…南無大師遍照金剛…と涙声で唱え、
悲しそうに去っていった。

その時の感触、一瞬感じたことは、決して忘れられない「祈り」であった。
四国の遍路道には様々な祈りが流れている。道半ば、行き倒れた遍路たちの悲願が響いている。

卑劣な「悪意」や「詐欺」でさえ白昼堂々で行われている世の中である。

「真実」の祈りがまかり通らぬという



ことはない。

そんな「祈り」よりも「一発の銃声が
答えだ」と欺瞞に満ちた人たちが言う

「祈り」は無意味ではなく

「実現」してこそその「祈り」である。

…何を祈るのか(想うのか)を明確に
すればするほど、現実化(実現化)す
るようだ。

空海は…

「仏と我々の三密(身・口・意)が、
不思議な働きによって、応じあう時、
速やかに、さとりの世界が現れる」
と言っている。

人は誰もいつかは「死」を迎える。

遍路の祈りの旅は、

終わることなく続いている。

如来に見護られ

祝福がありますように-